

活動紹介

「きほんのきのかい」では、学生にデザインの「きほんの“き”」を学ぶ機会を幅広く提供しています。この写真は「きほんのきのかい」で実施したあそびイベントの一場面です。見るだけでなく“さわる”ことはとても大事です。実際に触るからこそ、その柔らかさ、温かさ、重さなどを知ることができます。そこで、直径0.5m×長さ7m程度の長いへび状のクッションを用意しました。クッションの中には小さなビーズやボールが入っており、部分的に触り心地が変わります。粘土あそびのように、積み上げて山を作って登ってみたり、トンネルを作ってみたりと、形をかえながら次々にあそびを発展させていきました。

活動メンバー

デザイン学部 教授 細谷 多聞
デザイン学部 准教授 小宮加容子
デザイン学部 「きほんのきのかい」学生

札幌市立大学
附属図書館

SAPPORO CITY UNIVERSITY



<https://www.lib.scu.ac.jp/>

編集後記

21世紀に入り、科学技術がかつてなかったようなスピードで進歩するとともに、社会は一層複雑化し多様化しています。このような状況の中で、大学では専門研究の深化だけでなく、教養教育、リベラルアーツ教育の必要性があらためて重視されるようになっていきます。

では、21世紀を生きる私たちに必要な知識、教養とはどのようなものでしょうか。今号の特集テーマはこのような問い立てから始まりました。執筆者の方々にはそれぞれの知見や経験から、多様な内容のエッセイをご寄稿いただきました。読者の皆様にとっても、21世紀に生きる私たちの、さまざまな「知」や「学び」のあり方について考えるきっかけになったのではないかと思います。「教養」とは、学びを広げるだけではなく、人の生そのものを広げていくものなのではないでしょうか。本号が、新たな知の探索へとつながる一歩となれば幸いです。

デザイン学部 松井 美穂

札幌市立大学附属図書館ニュースレター
のほほん第18号

編集 札幌市立大学図書館運営会議
編集委員 小宮加容子 渋谷 友紀
牧野 夏子 松井 美穂

発行日 2025年1月20日

発行 札幌市立大学附属図書館
〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目
事務局 地域連携課 図書館担当
TEL.011-592-2346

制作・印刷 三浦印刷株式会社

ご感想をお聞かせください。
library@scu.ac.jp



見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。



札幌市立大学
附属図書館
ニュースレター

のほほん

第18号
2025年1月

ロゴマーク デザイン学部メディアデザインコース1期生 木村 尚史



あそびイベントMoNaKa『さわってあそぼう!』

札幌市民交流プラザ(2024年7月28日)

特集

「21世紀の教養とは?」

知と身体性

デザイン学部 教授 細谷 多聞

看護の原点 -「art」&「science」-

看護学部 教授 松野千代美

批判とやさしさのバランス:
学生の成長を促す関係性

デザイン学部 准教授 御手洗洋蔵

未来を創る力:
デザイン学と看護学の協働

看護学部 准教授 村松 真澄

他者を真剣にうけとる

デザイン学部 講師 藤沢 礼央

心豊かな人生を送るために

看護学部 助教 平山 憲吾

人生という物語の共振

デザイン研究科 博士前期課程1年 来田 玲子

博物館で出会った自分と教養と知らない世界

看護学研究科 博士前期課程1年 小島 汐織

故郷を振り返る

デザイン学部3年 岡本 明佳

楽しさが育てる知識と教養

看護学部3年 柳谷 綾香

カウンターの内側からの図書紹介

芸術の森キャンパス・ライブラリー司書 中川このみ

桑園キャンパス・ライブラリー司書 森田 桃花

企画展紹介

水木しげる・関連図書、集めてみました。

自著紹介

学長 中島 秀之

附属図書館 貸出・視聴ランキング

札幌市立大学
附属図書館

SAPPORO CITY UNIVERSITY



<https://www.lib.scu.ac.jp/>

知と身体性

デザイン学部 教授
細谷 多聞

筆者紹介

電子情報技術が急速に発展する時代にデザイン教育に携わり、インタフェースデザインや情報機器のプロダクトデザインに関わる研究を続けてきた。札幌市立大学着任後は、地域固有のデザイン課題に研究の軸足を移しながら、近年ではものづくりを通じた人の生涯やウェルネスに関わるデザインの実証的研究に取り組んでいる。

私はもうすぐ60歳になる老教員です。大学生になったのは遥か昔の1985年、そのころはコンピュータもインターネットありませんでしたから、知識は私の頭に記憶することしかできませんでしたし、持っていない知識は、実社会（人との交流）や、図書館に出向くこと、失敗を繰り返しながら自らの経験を積むことでしか増やせませんでした。その後起こった情報通信技術の革新は、こうした知識の得かたを次々と陳腐化していくことになります。それは言うまでもなく「知の外在化」を指します。

現在では知を自ら携えることよりも、インターネットに点在する知の検索・編集する能力の方が有益なものと考えられています。我々ひとり一人が携える知よりも、多くの知を統合してより正確な情報としてまとめ上げることに価値が見出されているのです。このような時代において「教養」もかつてのそれとは大きく異なるものになっていることは想像に難くありません。ひとりの人間が経験を積むことで継続的に涵養されていた「知」は、情報を探す機会とそこで編集する断続的な知の集積に置き換えられはじめています。教養は、その原料である知の継続性と断続性に大きな違いが生まれているように思えます。

図書館に出向いて新たな知を得ることと、インターネットを用いて情報を得ることには、結果として得られた知には大きな差はないように見えます。しかしながら、知を得るために伴う経験には差があります。電子的な情報環境は目的に対して限りなく直線的に向かうよう設計されます。我々は知りたい事柄（目的）に限りなく近いように検索ワードを選びますし、検索エンジンの精度もこうしたニーズに応えられるよう、用意されています。さらにこの先、人工知能によってもたらされる知の獲得の利便性も、限りなく直線的に目的を遂げようとすることは容易に想像できます。一方、実社会や図書館に出向いて得る知には、冗長とも思える煩雑さを伴います。道すがらの経験や時間的・空間的な記憶を伴いながら得る知は、効率性こそ期待できませんが、結果として得た知に付随した多くの思考を伴います。これが先に指摘した継続性を涵養する素地となるのです。

こうしたことを論じた1冊の本があります。心理学者であるレベッカ・フィンチャー-キーファー（Rebecca Fincher-Kiefer）が著した「知識は身体からできている：身体化された認知の心理



イラスト
デザイン学部4年
小池 花音

学」という本です。「抽象的知識の表象はマルチモーダルであり、感覚運動機能から発達し、感覚や運動行為に関わる神経経路を共有しているという身体化理論で説明することが可能である」といった仮説を、我々のさまざまな振る舞いの断片から検証した本です。著者は、我々のさまざまな知識はたとえそれが概念的なものであったとしても記憶化される際に身体性を伴っていることを主張しています。もちろん身体性には、多くの人に共通するものやその人固有のものもあるでしょうが、乳幼児の発達に見られるような「身体の動かし方、そのフィードバックから概念を知る」ことが生物としての人間の本質的な性能であるとする知見は納得のいくものだと思います。

とはいえ、猛烈に進む断続的な知の獲得（電子的な情報環境）の勢いに逆らい、私の経験したような継続性のある知の獲得を見直しましょうとは言いません。また、教養の題材は、時代とともに変わるものだと思いますから、20世紀の教養がそのまま21世紀のそれに継承されるとは思えません。むしろ、かつての教養は断続性の中で引き出される知に変わり、21世紀には新しい教養の題材が必要となってくるのだと思っています。私は、未来に生きる皆さんにそれが何であるかを示すことはしませんが、人間の本質的な性能が導く題材であり、少なくとも「知の検索・編集能力」ではないことを願っています。

参考文献

レベッカ・フィンチャー-キーファー著
「知識は身体からできている：身体化された認知の心理学」
新曜社、2021
芸術の森 2F 一般図書 141.51/Fin

看護の原点 – [art] & [science] –

看護学部 教授
松野 千代美



イラスト
デザイン学部4年
古城 花奈

「病人を看護することはひとつの芸術である。しかも系統的で実地に則した科学的な訓練を必要とする芸術である。」この一説は、1893年にフロレンス・ナイチンゲールが記した「病人の看護と健康を守る看護」に著されています。「看護覚え書」をはじめとした多くの著書がある中で、この一説を示してくださいましたのは、恩師である松浦和代名誉教授です。本著は、19世紀から現代、そして未来にまでも永続的に必要となる看護学の知識を示した論文だと確信します。

この一説との出会いは、2020年のコロナ禍における看護をふり返る機会をいただいた時でした。ある学会のシンポジウム「災害としてコロナ禍を考えるー寄り添い・つながり・継続ー」において、医療現場の管理者としての支援の実際を紹介することが自分の役割でした。後期課程に在学中であった自分は、松浦先生にこの役割をお伝えしたところ、「ナイチンゲールの述べたart&scienceについて論じるとよいと思います。」という助言をいただきました。恥ずかしながら、この言葉を初めて知り、必死に調べ、たどり着いた著書の中に本説が記されていました。

「病人の看護と健康を守る看護」の冒頭に、「新しい芸術であり、新しい科学でもあるものが、最近40年の間に創造されてきた。」とあり、「art」、「science」、「profession」としての看護について明言されています。covid-19感染症の看護を経験して、決して忘れ得ぬことは、自施設クラスター発生に伴い病の治療中に感染を受け、その生命をも脅かされる患者と家族の姿を目の当たりにしたことでした。看護師たちは、厳重な感染拡大予防策の遵守により、今までのように患者に寄り添い話を聞くことができない辛さや、家族と面会もできない、当たり前のケアができないことへのジレンマ、苦痛がある患者に何もできないという無力感を抱き、苦悩の日々を過ごしていました。しかし、看護師長はコロナ禍における新たな看護管理へのチャレンジを決意しました。患者へのケアをふり返るとともに、看護師個々の感じたこと、つらい思いを吐露し、看護チーム内で共有を図りました。「今この状況の中で患者にできるケア、家族の気持ちに寄り添える看護は何か、もしも自分の家族だとしたらどうするか考えてケアを行おう。これまで、みんなで大切にしてきた看護を忘れずに

やってみよう。」という看護師長の言葉により、看護師たちの行動は変化しました。家族が患者にできることを叶えることや思いを最優先にすること、リモートでの面会、家族へのきめ細かい患者の状態の報告など、患者一家族間のつながり作りを実践しました。また、スマートフォンを通してのお看取り、入念な感染予防による亡くなられた後の面会も実現することができました。未曾有の渦中においても、これまで磨いてきた知と技を結集し、仲間とともにその力を発揮する看護職の姿がそこにはありました。本著において、「art」と「science」を生み出していくために、「看護師が指導のもと訓練を受けて積み上げていく」と示しています。コロナ禍において、先輩看護師は、新人看護師に対し、科学的根拠に基づく感染拡大の予防策と患者の安全、安楽の確保、現状において可能な最大限の看護ケアについて指導し、共に実践しました。そして、この経験を活かして大きく成長した新人の姿から、まさに「art」と「science」の伝承を実現したと言えます。

どんなに新しく苦しい世界が訪れても、「profession」である看護が脈々と培ってきた原点をつないでゆく、これがいつも新しい「熟練の技＝art」と「科学的実践＝science」の創造だとあらためて実感しました。

私にとって本著は、示唆に富む手放せない1冊となりました。

参考文献

薄井坦子 [ほか] 編訳
「ナイチンゲール著作集 第二巻」現代社、1974
桑園 一般図書 492.9/Nig/2

批判とやさしさのバランス：学生の成長を促す関係性

デザイン学部 准教授
御手洗 洋蔵

筆者紹介
札幌市出身。小さいころから植物に興味があり、東京農業大学に進学。同大学大学院で博士（農学）を取得後、2023年より札幌市立大学で教鞭を執っています。専門は、緑を活用した癒しの空間づくりです。ストレスの多い現代社会で、少しでも「ほっと」できる緑の空間が増えることを願い、研究と実践を重ねています。

イラスト
デザイン学部4年
三浦 奈々佳



大学教育において「教養」という言葉を聞いてまず思い浮かべるのは、英語、哲学、歴史、憲法など、大学の専門教育科目ではない、いわゆる「教養科目」だと思います。これらは、学生が社会人になるにあたり「これからの人生をより豊かにしてくれる学び」といった雰囲気があり、また全国各地の大学で、さまざまな学部の教育において共通して設けられている科目だというイメージを個人的に持っていました。しかし、あらためて「教養科目」について調べてみると、教養科目で身に着けたい能力は大きく以下の4つのカテゴリーに分けることができます。①幅広い知識、②深い思考力、③批判的な洞察力、そして④自ら学び続ける能力（意欲）の4つです。これらの中で、個人的に気になったのは「批判的な洞察力」でした。

私は2023年度に札幌市立大学に赴任したため、まだ札幌市立大学の学生のカラーについては把握しきれていませんが、いくつかの授業や演習、実習を通じて学生たちとかわる中で一つ気になったことがあります。それは、学生同士で互いの発表や制作物について、指摘したいことや疑問があっても、それを相手に投げかけないことです。また、授業で学生たちに他の学生へのコメントを求めても、良いコメントや当たり障りのないコメントしか出てこないことがあります。たとえば、「こうしたらもっと良くなる」や「ここが今一歩だ」というように、相手の不足している部分（マイナス点）について指摘することを避けているように感じました。ある授業で同様のことがあり、発表者の学生が帰った後に、残った学生たち数名にあらためてどう思ったか意見を尋ねたところ、「あれはもう少しだったね」や「少しわかりづらかったかな」といった意見が出てきました。そのため、学生たちは「批判的な洞察力」をある程度持っていることがわかりましたが、それを心の中に留めているようでした。では、なぜそれを伝えないのかというと、それは相手への思いやりや、相手を傷つけてはいけないという「やさしさ」からだと思います。相手への「やさしさ」を持つことは大切な教養の一つだと感じますが、それだけを尊重しては互いを高め合うことにはつながりません。そのような場合には、相手に嫌な思いをさせない、あるいは悲しい思いにさせないコミュニケーション技術を身につける必要があります。また、批判的な内容を指摘された側も、批判されたことにショック

を受けるのではなく、それを受け止める懐の深さを持ってほしいと思います。これらの能力を高めるためには、教養科目でも講義形式ではなく、やはり演習形式のものが効果的だと思います。

今年2024年に1年生のスタートアップ演習を担当した際に、「レポートの書き方」についてレクチャーを行う単元があり、その中で学生たちに共通のテーマでレポートを書かせました。普段ならそのレポートを回収して教員側で評価しますが、今回は一緒に担当した看護学部の先生の提案もあって、まずは学生同士でペアを組ませ、その二者間で互いのレポートを評価させることにしました。そこで求めたのは、ペア相手のレポート内容を読んで、①良かった点（評価できる点）、②改善したらもっと良くなる点を記述することです。すると、学生たちは意外にも①も②も具体的にしっかり記述しており、また書かれた内容について納得している印象を受けました。授業後に求めたコメントシートでも、「普段良い点ばかり書くことが多かったので、新鮮だった」という意見が得られました。

このような状況は札幌市立大学の学生に限らず、他大学でも起こっていることだと思います。まさに21世紀の現在、多くの大学生が共通して足りていない能力かもしれません。そういった視点から、今回は「批判的な洞察力」という観点から述べさせていただきました。ぜひ札幌市立大学の学生たちには、このような力を伸ばしてほしいですし、このような小さな積み重ねが学生の「批判的な洞察力」の向上、ひいては教養の習得につながることを期待しています。

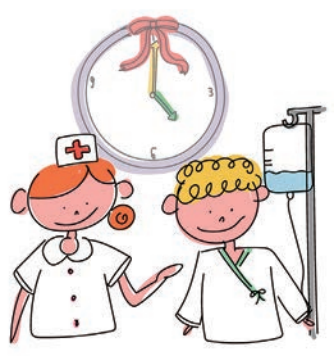
参考文献
佐藤佐敏、中野博幸編著「批判的思考力を高めるエクササイズ」図書文化社、2023

未来を創る力：デザイン学と看護学の協働

看護学部 准教授
村松 真澄

筆者紹介
北海道出身。北大病院を中心に24年看護師として勤務。2007年4月から本学に勤務。食べる、幸せに生きるをテーマに教育・研究・社会貢献活動を実施しています。

イラスト
デザイン学部4年
田中 美ん風



1. 序論：21世紀における教養

21世紀における教養は、単なる知識の蓄積ではなく、変化の激しい現代社会に対応する力を意味します。テクノロジーが急速に進化し、グローバル化が進む中で、私たちは多様な状況に柔軟に対応できる力を求められています。特に、デジタル時代ではAI（人工知能）やDX（デジタルトランスフォーメーション）に対する理解が不可欠です。私たちの生活や仕事の多くがデジタル化され、これらの技術を効果的に活用するスキルは現代の教養として重要です。

また、現代社会では他者への共感や多様な視点への理解も必要です。グローバル化が進む中で、異なる文化や価値観を尊重し、協力し合う力が求められています。21世紀の教養とは、幅広い知識とともに、柔軟な思考を持ち他者を受け入れながら自分の役割に責任を持って行動する力を指すのです。

2. 本1冊目の紹介：エリック・トボル「DEEP MEDICINE」

「DEEP MEDICINE」は、AIがどのように医療を変革し、人々の健康やケアに影響を与えるかを探る本です。著者は、AIが医療の効率を高めるだけでなく、医療従事者と患者との間に「時間」を生み出し、より深いコミュニケーションやケアを実現できると述べています。AIがデータ分析や診断を自動化することで、医師や看護師は患者と向き合う時間を増やすことができるのです。

このように、AIは技術的な進歩にとどまらず、人間的なケアを取り戻す手段となる可能性を秘めています。AIをどう活用し社会に役立てるかという倫理的な視点も求められます。本書では、テクノロジーと人間性のバランスを考える上で、現代に必要な教養を示しています。

3. 本2冊目の紹介：アラン・ケレハー「コンパッション都市」

「コンパッション都市」は、共感に基づいたコミュニティ作りの重要性を説いた本です。本書では、医療が市民の生活に関与する時間は5%未満であり、残りの95%は日常生活や地域社会の中で過ごされているとし、市民同士が互いに支え合い、共感に基づくケアを行うことが、健康やウェルビーイングを高めるために不可欠であるとしています。

コンパッション都市は、日常生活の中で自然に他者をケア

できる社会を目指しています。終末期ケアにおいても、医療従事者だけでなく、市民それぞれが自分にできることをし、支え合うことで、質の高いケアが実現されます。このアプローチは、21世紀の教養が単なる知識の修得ではなく、共感や協力に根ざしていることを示しています。

4. 結論：21世紀の教養の重要性と実践

21世紀に求められる教養は、知識・技術の上に、共感や倫理的判断力も含む包括的なものです。「DEEP MEDICINE」では、AIが医療を効率化し、人間らしいケアを取り戻す可能性を示しています。一方、「コンパッション都市」では、社会全体が共感に基づいてケアを行うことが、持続可能な社会を築く上で重要だと強調されています。

これらの本が教えるのは、21世紀の教養が単なる専門的知識にとどまらず、幅広い知識を得て、他者への思いやりと社会貢献の力を伴うものであるということです。AIやDXの進展が急速に進む現代において、技術をどのように活用し、社会にどのような影響を与えるかを考慮しながら行動することが求められています。これこそが、21世紀の教養として私たちが身につけるべき資質であり、未来を切り開く道しるべです。

学生へのメッセージ

デザイン学部と看護学部の学生のみなさんには、21世紀の社会をリードする力が求められています。皆さんのデザイン学と看護学との連携の学びが、より良い未来をデザインし、人々の健康と幸福を支える役割を果たすことを期待しています。

参考文献
エリック・トボル著；柴田裕之訳
「ディープメディスン：AIで思いやりのある医療を！」NTT出版、2020
桑園 一般図書 498/Top
アラン・ケレハー著
「コンパッション都市：公衆衛生と終末期ケアの融合」慶應義塾大学出版会、2022
桑園 一般図書 498/Kel

他者を真剣にうけとる

デザイン学部 講師
藤沢 礼央

筆者紹介
北海道洞爺湖で生まれ、苫小牧の海と山で育つ。山菜を採り、魚を獲り、鹿を捌き、料理をする。旅が楽。旅先からどうして家に帰らなければならないのかをいつも悩みながら帰路につきます。芸術を中心に、工芸・建築・地域教育・まちづくり等異分野が溶け合うような仕事と研究を続け、2023年10月より現職。

アートを仕事にしてから25年ほどが経ち、2023年春から北大文化人類学研究室で大学院生になり、同じ年の秋には大学教員もはじめることになりました。まさか1年の内にそのような人生になるとは望んでも難しいように思いますが、新しい世界に進んで出会っていくのは決して珍しいことではないでしょう。

私の経験ということになるので、アーティストを代表した話ではないのですが、多くのアーティストは地に足のついた活動を行っています。奇想天外で浮世離れた天才的な変人に会うことはまずありません。多少過激であったり、多少社会性がなかったり、多少他人の話が聞けなかったりする方がいない訳ではないですが、それはどんなところにもままいるのではないのでしょうか。ただ総じて言えることは好奇心がとにかく旺盛で、年齢に関係なく持ち続けており、同時に自身の無知を自覚しています。無知は新しい知や好奇心が注ぎ込む土壌となるため、無知の広大さを好んでいる節があります。

アーティストはよく旅人として扱われることがあります。それは視点が新鮮なことや、常識通りの行動をとらないことなどが由縁ですが、それも出会った事象に対して無知と自覚しているが故によく観察をし、どこから観ると魅力的か、可笑しみがあのか、その場ではどのように捉えられているのか、それはポジティブなのかネガティブなのかなど、多角的に観る習性がそうさせています。ある時はそのような振る舞いが新しい風潮だと喜ばれたり、秩序立った場では警戒心を喚起してしまったりと清濁どちらになる可能性も秘めています。

文化人類学へ進んだこともそのような習性に関係しています。さらにもっと遠くからの視点でアートを観察したくなったためこの手法を選びました。遠くを観ることは文化人類学のフィールドにおいて重要なことですが、あまりに遠くを見すぎるため、一体何をやっているのか訝しがられることも多いようです。全く違うフィールドに入ったと思ったら、アートも文化人類学もそれらの振る舞いが訝しがられるという共通の悩みを抱えており可笑しくなります。

さて本題に入り今後の教養は?と考えてみると、「遠くを観る」ことが非常に重要な気がしてきました。「遠く」についてを考



イラスト
デザイン学部4年
三浦 奈々佳

てみると自身から見て距離が遠いこと。これは異国や他地域のこと、そこに根ざす文化のこと、そこで起こっていること、そこで起こってきたこと、等々。または価値観が遠いということもあります。これはすぐ側でも起こり得ることで、世代の違い、性の違い、性格の違い、常識の違い、立場の違いなど数限りない「遠く」が身の回りにもあふれています。言葉ひとつとっても、母語の違いは明白に考え方の違いに気づくものですが、専門用語や世代間の用語、さらに民族の違いなど同じ言語を使っていたとしても文脈や意味の差異によって、共有しきれないズレが日常的に起こります。

「遠く」は様々な事象により感じるようになります。その度に遠いからと退けてしまっでは無知の土壌に知が流れ込み、豊かになっていくことはないでしょう。また目の前の価値観によって近いものばかりを選んでしまっても新たな知の流れは生まれません。

「遠くを観る」とは、想像することが難しいほど遠くのことであっても、眼前において気にも留めなかった、目を向けてこなかった（人間以外も含む）他者に対して、目を向け、耳を傾け、真剣に受け取る、受け入れてみることだと思います。

多くの他者、多くの個に対して真剣に向き合うことこそが、多様性を実感し、理解し、尊重することであり、自身も多様性の一部として生きられるこれからの教養だと考えています。

参考文献

- 山口未花子, ケイトリン・コーカー, 小田博志著
「生きる智慧はフィールドで学んだ：現代人類学入門」
ナカニシヤ出版, 2023
ティム・インゴルド著；奥野克巳, 宮崎幸子訳
「人類学とは何か」 垂紀書房, 2020
芸術の森 2F 一般図書 389/Ing

心豊かな人生を送るために

看護学部 助教
平山 憲吾



イラスト
デザイン学部4年
田中 美ん風

「21世紀の教養とは？」というテーマをChat GPTに尋ねると、「デジタルリテラシー」、「クリティカルシンキングと問題解決能力」などと回答してくれます。そうだな…と思いながら、今回「教養」とは何かを考え直す機会と捉えて述べていきたいと思います。

私が大学生の時、学生達は皆「1年生は教養（科目）」とっていました。身近な用語として使っていましたが、本質は何でしょうか。そこで、出口治明著「本物の教養」という本を購読したところ、教養の本当の意味を学べる1冊だと感じました。

その本との出会いもあり、教養とは、学問を幅広く学ぶ、のではなく、心を豊かにするためのモノである、と感じました。心を豊かにする＝楽しい人生を送る、ことになるはずです。そのためには、知識を身につけること、経験を積むことは不可欠であると思いますが、これらは教養を高めるための方略なのだろうと思います。

筆者紹介で、私は旅行が好きだと書きました。私にとって、旅をすることは間違いなく心を豊かにし、人生を楽しませてくれているため、教養を育むためには必要です。実際にエジプトのピラミッドを訪れた時、圧倒的なサイズ感に言葉も出ませんでした。札幌テレビ塔とほぼ同じ高さ（約150m）、積み上げられている石の1つの大きさは人の背丈と同程度、ピラミッド内に一歩踏み入れれば異様な空間など、外気温40℃超の非現実的な世界で体験したことは今でも鮮明に覚えています。ペルーのマチュピチュは、アンデス山脈中の標高3,400m（富士山の8～9合目くらい）にあるクスコという都市を経由しなければなりません。高山病を発症し、息苦しさ、吐き気、眩暈の症状が出ましたが、辿り着いたマチュピチュ遺跡を見た瞬間に疲労と症状は全て吹っ飛びました。この時点で人生は楽しいと思えるのですが、その経験の中でも、「なんでこんなところに?」「どうやって作ったの?」と、ハテナが出てくるわけです。このように考えていくことによって、新たに楽しいと思えることを求めるようになり、こういった循環が教養力を高めるために必要なだろうと思います。

また、私は看護学部にも所属しているので、看護についても考えてみます。看護を提供するうえでは、原理・原則の理解は不可欠ですが、対象者が生きてきた時代背景を知り、個人の価値観や意

向に向き合うことも大切です。以前、私が病院実習を担当していた時、ある学生が90代の高齢の方を受け持ちました。一般的に、高齢者は新聞や雑誌などを情報ソースとすることが多く、その対象者も活字が好きな方であり、病室には雑誌なども置いてありました。学生は、対象者との会話や病室環境からその特徴を理解し、新聞という形でオリジナルの教育資料を作成してお渡ししたところ、とても喜び熱心に読まれていました。このように、専門領域外のこともある程度知ること必要だと思いますし、高橋優三の著書においても患者の多様な価値観に向き合う姿勢の重要さが述べられています。

今、私たちはVUCA時代を生きています。予期しない変化に適応し柔軟な考えを持つことができる力を獲得していかなければなりません。ただ、この状況をネガティブに捉えるのではなく、知識や経験を蓄積していくという方略を用いて多様な見方をできるようになることでより良い行動を取ることができるようになり、結果的に楽しい人生を送っていくことに繋がるのではないのでしょうか。それが、21世紀の教養として必要なこと、と考えます。

参考文献

- 出口治明著「人生を面白くする本物の教養」 幻冬舎, 2015
高橋優三編著；岡本華枝 [ほか] 著
「君はどんな看護師になるのだろうか：多様な価値観と向き合う、これからの看護師に必要な知識と教養」
医学書院, 2024
桑園 一般図書 492.9/Tak

人生という物語の共振

デザイン研究科 博士前期課程 1年
来田 玲子

筆者紹介
専攻である人間空間デザインに留まらず、幅広い分野で活動中。日常を過ごすなかで見落としてしまう“死考”の記録や再提示をテーマにデザインを行い、対話を重ねている。死考とは、“死”を捉えることで、裏に存在する“生”に意味を見出し、自分を受け入れていく思考を指す。卒業研究ではスペキュラティブデザイン「死考と弔いを醸成する空間」によって、“死”を思考することで浮かび上がる“生”の豊かさを社会に問いかけた。

時は遡り2006年、保育園でのお昼寝の時間。同級生がスヤスヤと眠る中、当時5歳の私は一人「死の恐怖」と闘っていました。ことの発端は恐竜図鑑。火の粉から逃げ惑う恐竜たちの絵は、たった一撃の隕石によって絶滅した恐ろしい最期を語っていました。人間よりも何倍も大きく強い恐竜が一瞬にして…!?その事実を知った日から「隕石落下×人類絶滅」という杞憂に悩まされるようになります。この死への恐怖は大人になるにつれ、より現実味の強い恐怖（戦争・通り魔・強盗など、結局は人間が一番恐ろしい…）へと変化しつつ、いまだに私を揺さぶっているものです。詩人・谷川俊太郎さんが様々な質問に答える著書「谷川俊太郎質問箱」には、幼い日の自分を思い出す質問が載っています。「どうして、にんげんは死ぬの？さえちゃんは死ぬのはいやだよ。」6歳のこやまさえちゃんからの質問です。ここでは谷川俊太郎さんの答えをあえて紹介しませんが、漠然としたこの不安を言葉にしたこと、その不安の答えを探したこと、周りの大人に聞いたこと、とても大切な行動だと思えます。

近代化の進んだ現代の日本社会では、死に瀕する経験や死に接する機会は多くありません。先人の偉大な努力により、住む場所も職業も結婚も、ライフスタイルの自由はほぼ確約されています。「生きやすい」社会では決してありませんが、「生物学的な意味で生きるのが容易い」社会にはなっているのではないのでしょうか。命が保障された上での自由は私たちに数多くの選択肢を与えました。しかし、同時にその道を選ぶ責任を与えたことも確かです。自分で道を作る、しかも、その方法が複数ある今、道での躓きは全て自分の責任となります。三本道の中から一本の道を選ぶならば、躓いても道のせいにできたのに…。自己責任論に追われ、道を作る方向や方法を探そうと思っても目に入るのは先行きを不安にさせるニュース、羨んでしまう華やかなSNSの世界、アルゴリズムで構成されていく投稿。情報が絶え間なく脳内に流れてくる中、どれを正しいとするのかさえ、自分の責任となっています。

選択肢も情報も自由に選べるからこそ、選択の指針が必要です。その指針こそが「教養」ではないかと私は考えています。教養はその字の通り「教わって養う」もの。人から教えを受け取り、人生の出来事を通して養っていきます。私たちは、過去・現在・未



イラスト
デザイン学部4年
太田 未夢

来という時間軸を持つ唯一の生物です。これまでの記憶で形成されたきた過去の「自分」。そして、これから色々なことを体験するであろう未来の「自分」。時間軸を持つために、死を「自分」の消滅、または、変容をもたらしてしまう恐ろしいものと感じてしまいます。さえちゃんも幼い日の私も、その消滅や変容という“点”に囚われました。しかし、人生というものは“線”のように続いている、因果関係を紡いでいくものです。誰かの教えを受け取れるのも、その教えを自分なりの解釈に変換できるのも、人生という因果のおかげです。

人は「教えよう」というよりも「伝えたい」という気持ちで、何かを残していきます。その気持ちの集合体のひとつが本/文章であり、人々の人生を多様な形で伝え、また、その人生を受け取った側が「教え」に変換していくものです。今日書いたこの文章も全て私の中だけで生まれたモノではなく、多くの人生から影響を受け、私の中で発酵していったモノだと思います。日々の感情を救いとる益田ミリさんの「今日の人生」。従兄弟の死と文学愛を糧に出版社を続ける島田潤一郎さんの「あしたから出版社」。鬱をテーマに鬱々とした感情をそれぞれの視点で語るアンソロジー「鬱の本」。私は誰かの人生をそのまま覗くエッセイが特に好きです。それは、きっと誰かの人生と自分の人生をリンクさせる共振が起こるからでしょう。この苦しみや悲しみが、「自分だけのものではない」と、「孤独ではない」と、本は教えてくれます。死の恐怖を知ったあの日から、さえちゃんのような「仲間」に読書を通して出会い、一緒に答えを探し続けています。

参考文献
谷川俊太郎著「谷川俊太郎質問箱」東京系井重里事務所, 2007
桑園 一般図書 914.6/Tan
内田樹, 釈徹宗著「日本宗教のクセ」ミシマ社, 2023
芸術の森 1F 後援会 162.1/Uch
内山節著「いのちの場所」岩波書店, 2015
益田ミリ著「今日の人生」ミシマ社, 2017
島田潤一郎著「あしたから出版社」筑摩書房, 2022
屋良朝哉, 小室有矢, 今関綾佳編「鬱の本」点滅社, 2023
芸術の森 1F 後援会 914.68/Yar

博物館で出会った自分と教養と知らない世界

看護学研究科 博士前期課程 1年
小島 汐織



イラスト
デザイン学部4年
古城 花奈

先日、東京に赴く機会があり上野にある国立科学博物館を訪れた。国立科学博物館は地球と生命がどのように進化してきたか、人類が如何に文明を築いて科学技術を発展させてきたかを、自然史や科学技術史の観点から実証的に、継続的に探究し、その研究成果を裏付けとなる標本資料とともに将来へ伝えていく役目を担っている施設である。館内は「日本館」と「地球館」で構成されており、様々な分野の標本資料や研究成果が展示されていた。飛行機の搭乗時間というタイムリミットもあり、滞在可能時間は2時間程度であった。私のお目当ては、「地球館」の3階にある様々な動物の剥製である。何体もの剥製が一同に集結し、鎮座している様子は圧巻であった。

次に向かったのは「地球館」2階の「科学と技術の歩み」である。江戸時代の科学技術から近代化までの歩み、様々な分野の知が集結していた。私は根っからの文系であるため、科学技術への関心は強いものの、基本的な知識がすっぱり抜け落ちている。しかし、展示は子どもも楽しむことができる体験型のものも多くあり、知識がなくとも十分に楽しめる展示であった。

展示の1つである昔の科学者のノートの複製を見たときに、私の感想は「過去の資料が閲覧、複製可能な状態で現代まで残っていることが素晴らしいなあ」だった。しかし、同行者であった父と弟は「このノートに書かれている数式は〇〇を示していであ、だからこの機械の展示の横に置いてあるのか〜（以下理解不能な専門用語）」と大変感動していた。2人は真正正銘の理系であり、展示のひとつひとつへの基礎知識や背景を知っているからこそであろう、過去の技術の展示に驚嘆の声を挙げている。持っている知識が異なることで、同じ事象を見てもこれほどまでに抱く感想は異なるのかと、大変驚いた。そこで今回いただいたテーマを振り返りたい。21世紀における教養とは何だろうか。私はこのテーマを見たときに、この経験を思い出した。教養とは、物事の解像度を各段に上げてくれるものであり、発見や学びをさらに豊かなものにしてくれるのだろう。

また、国立科学博物館内にあった展示の中に、科学技術に関する出来事が記された年表があった。そこで一番印象深かったのは、「農業が学問となる」と書かれたものであった。その文言は年表の真ん中に記されており、長い学問の歴史からは新しい

もののなのだろう。看護学も同様に新しい学問であり、私たちはその最先端にいる。そしてこの世界には学問となりうる知の体系はまだまだあるのだろう。私たちの生きる21世紀は、さまざまな知が存在する。ポケットからスマホを出せばすぐに情報にアクセスできる世界だ。昔には出会えなかった知にも気軽に出会えるようになっていく。気軽に情報にアクセスできる今だからこそ、本に触れてみる。小さい頃、まだ1人で行くことのできる範囲に限られている頃、新しい世界を見せてくれるのは、いつだって本だった。そして、どこへでも1人で行くことができる今でも、行くことのできない昔を知るために本を読んでいる。

専門的な知識を深めれば深めるほど、自分の中にある知識の海は深くなる。ただ、この世界は自身の専門分野だけで構成されているわけではない。深い海に潜ってばかりだと苦しくなってしまうのではないだろうか。広い世界を知るためには異なる領域への理解も必要だと思う。新たな知見や今までの人類が切り開いてきた学問に触れるたびに、新鮮な驚きを得ることができる。驚きを得るために知識だけでなく、多角的な物の見方、批判的思考、柔軟な思考力、高い受容力があってこそ、教養は豊かになっていくのだと感じる。そしてこれらが21世紀の教養なのではないだろうか。多様性が謳われる現代には、自身の常識外の出来事と出会うことがきっと多い。それらを拒否せずに受け入れることから教養は磨かれていくのだろう。迷ったときや悩んだときには本を開く。そして、私の知らない世界の方が広いことに何度も気づかされるのだ。それらに出会える喜びをかみしめよう。

参考文献
成毛眞, 折原守著
「国立科学博物館のひみつ 地球館探検編」ブックマン社, 2017
重里徹也, 助川幸逸郎著
「つたえるエッセイ：心にとどく文章の書き方」新泉社, 2018

故郷を振り返る

デザイン学部 3年
岡本 明佳

筆者紹介
北海道利尻島出身。人間空間デザインコースで地域コミュニケーションデザインを学んでいます。ファッションや猫を愛でること、映画を見ることが趣味です。暑いのが苦手なので生涯北海道で暮らしたいと思っています。大学生活では色々な経験を積み、自分のしたいデザイン分野について研究していきたいです。

私には大好きな場所があります。その場所は北海道の北側に位置する利尻島というところで、人口は5千人ほどの小さな島です。私はその利尻島で生まれ、高校卒業までの18年間を過ごしてきました。今回このエッセイの執筆依頼をいただき「21世紀の教養」というテーマについて考えたとき、故郷から離れて暮らしてみても日々感じたことについて振り返ってみようと思いました。利尻島の学校は高校までが島内にあり、その後は島内で就職するか、学校に通うには島を出なくてはなりません。今では利尻島で育つ子どもたちのほとんどが、島を出ていきます。もちろん私もそのうちの1人で、高校生の頃までは早く島を出て色々なところに行ってみたくと、離島での生活に窮屈さを感じていたような気がします。

そんな中で札幌市立大学への入学が決まり、利尻島を離れた日は今でも鮮明に覚えています。飛行機の中から小さくなっていく故郷をみたとき、馴染みのある景色から離れていくことへの不安と寂しい気持ちでいっぱいでした。

大学生活、札幌での暮らしは便利かつたくさんの刺激があり、故郷の暮らしとの違いを感じさせられる日々です。例えば、24時間営業のコンビニ、分刻みに発車しているバスなど故郷には無いものばかりで初めは驚沢をしているような気分でした。

そんななかで大学3年前期、授業で子ども向けのアートワークショップを企画しました。楽しそうな子どもたちをみて、「もし私が幼少期に札幌で育っていたら、絶対に参加したいと思っていただろうな」と羨ましく感じました。故郷ではワークショップに参加したり、大学生と触れ合ったりすることはなかなかできません。この時改めて、エッセイのテーマでもある「教養」について故郷と札幌では大きな違いがあることを実感しました。

小さい頃の私は、絵を描くことやものづくりが好きで、よく1人で何かを作ってお母さんに自慢する子どもでした。中学では美術部に入りたかったのですが、文化部は吹奏楽部しかないため吹奏楽部に入りました。高校では念願の美術部に入りましたが、学校に美術の先生が在籍していなかったので絵やものづくりについては独学で学びました。進路活動が始まると、自分の学生生活を振り返って、学びたいことを自由に学ぶのが難しい環境に生まれたことを当時はコンプレックスに感じていました。正直、デ



イラスト
デザイン学部4年
小池 花音

ザインという分野を専門的に学べる学校があることすら知らないほどでした。

しかし不思議なことに、今ではそんな風に思うことがほとんどなくなりました。故郷を離れ、さまざまな地域出身の人と親しくなりましたが、育ってきた環境によって思考が違うのだなと実感することが多々ありました。お互いの故郷のことを知り合うことはとても面白く、新しい故郷の魅力にも気づくことができと思っています。

21世紀の今、私のように地方出身の人は、故郷を離れて学校や仕事をしている人も多いのではないのでしょうか。私の故郷は学校生活で学べることが限られていますが、豊かな自然や人との関わりなどから得られた経験自体が学びであると思いました。これは私に限らず、様々な環境下で培った経験こそが、その人にしかない教養になるのではないかと思います。札幌での暮らしの中でこのことに気づき、自分は少し成長したなと思いました。

ところで、私は本を読むことが苦手なのでこのエッセイで紹介できるような本があまり思いつきませんでしたが、せっかくなので利尻島についての本を紹介したいと思います。「地球の歩き方 島旅 利尻 礼文」です。私にとっては馴染みのある、素敵な風景やお店がたくさん載っています。このガイドブックを見て、私の大好きな場所に少しでも興味を持っていたら嬉しいです。

参考文献
地球の歩き方編集室編著
「利尻 礼文 4訂版 (地球の歩き方 島旅 ; 04)」
地球の歩き方, 2023

楽しさが育てる知識と教養

看護学部 3年
柳谷 綾香



イラスト
デザイン学部4年
太田 未琴

私は普段から、自分が楽しんで得ることのできる知識や教養を大切にしています。ここでは私がこの考えに至った理由をエピソードや参考になった本を踏まえながら書いていきます。

私の部屋は、捨てられない思い出の物、好きな本など生活には必ずしも必要ではない物が多く、少しでも掃除をサボると大変に汚くなります。そんな中でも、捨てられずにとって置いた良い感じの紙袋が、友達に貸す本を入れるのにぴったりだったり、捨てようと思っていた好きだけど流行ではないネックレスが意外と最近買った服にじっくりきたり、そんなことがよくあります。これは私の頭の中も同じで、例えば大学の講義中も好きな本や英語などの余計な情報がごちゃごちゃと頭にあります。集中できないように思えますが、講義の中で英単語が登場したら記憶を辿って「最近この単語勉強したな…」と考えたり、疾患の学習では「あの本の主人公ってこの病気だったかも…」というように、不要に思える知識が勉強の楽しさや知識の定着を助けてくれています。他にも、くだらないけど面白いと思ってメモをしておいた知識や、今は必要ないけど楽しいからとりあえず勉強してみたことが看護の勉強とか、他の人との会話に役に立つことがよくあります。そのため私は興味があるものならどんな知識や情報でも大切にするようにしていますが、これは中学生の時に読んださくらももこの「焼きそばうえだ」がきっかけだったと思います。この本はさくらももこの友人の植田さんが、さくらももこ達のおふざけによりバリで焼きそば屋を始めることになり奮闘し、最終的に現地のホテルの経営者がオーナーになってくれてお店をオープン、帰国後は…という話です。中学生の私は、「外国で焼きそば屋をやるなんて意味がないのにただ楽しんで、良い出会いがあって、それが本として出版できるってこの世に無駄なことってないのかも。」と思いました。それから、どんな物事や知識も自分が面白いと思うものならいつか何かに関係するのではないかと大切にするようになりました。

また先日、先にも書いたような部屋の煩雑さをどうにかしようと「持たない幸福論：働きたくない、家族を作らない、お金に縛られない」という本を読みました。この本には多くのお金や物などを持つことよりも、人との繋がりがりや知識を増やすことが重要であると書かれていました。その中に「自分が面白いからやって

いるだけだけど、やっているると直接的な金銭のリターンは無くても、いろんな人に知り合えたりとか物をくれる人がいたりとか、得られたものはいろいろ多い。」という一文がありました。本を読み終えても、部屋の物の量を減らすことはできませんでしたが、損得ではなくただ面白い、興味があるということが巡り巡って自分のためになるというこの一文にとっても共感できたのを覚えています。

情報が溢れ、さまざまな局面の複雑化が進む現代で本当に自分に必要な情報を選別し、知識や教養を身に付けていくことは簡単ではない気がします。だからこそ2冊の本が気づかせてくれたような、必要・不要以前に好きとか楽しいに立ち返って得る知識や教養を大切にすべきなのではないかと思います。こうした知識や教養は今必要ではなくてもいつかまわりまわって、自分の学習を助けたり、新たな興味を導いたり、生活を豊かにしてくれると思います。自分なりのやり方ですが、これからも私は興味や楽しさを基準に得る知識・教養を大切にしていきたいと思っています。

参考文献
さくらももこ著「焼きそばうえだ」集英社, 2019
※文庫化される前の単行書は所蔵あり
さくらももこ絵と文「焼きそばうえだ」小学館, 2006
芸術の森 2F 一般図書 914.6/Sak
pha [著]「持たない幸福論：働きたくない、家族を作らない、お金に縛られない」幻冬舎, 2017



本なんて読まなくたっていいのだけど、

芸術の森キャンパス・ライブラリー司書

中川 このみ

日々の暮らしの中に、読書という行為はどのくらい入り込めるのでしょうか。刺激的なものや魅力的なもので溢れる世の中で「本なんて読まなくたっていい」と考える人は、きっと私が感じている以上にいるのだと思います。ここでは、そんな「読まなくたっていい」に「けれど」を加えたタイトルの図書「本なんて読まなくたっていいのだけど、」を紹介します。

本書は、本にまつわるエッセイ集です。著者は有限会社BACH（バッチ）の代表で、ブックディレクターを務める幅允孝（はば よしたか）さん。自身について「人が本屋に来ないので、人がいる場所に本を持ち出していく仕事をしている。」（p.11）と語るように、病院に新設するライブラリーの制作や、朗読イベントの開催といった仕事をしている方です。

本書では、本にとどまらず雑誌や映画、戯曲など多様な作品が登場します。本書収録の「お酒を呑みながら『エヴァ』を語ろう」と題したエッセイでは、映画「エヴァンゲリオン新劇場版：Q」の話から、その主人公がもつコンプレックスを介して戯曲「オイディプス王」の話へ波及。さらにはSF小説「タイムマシン」「果しなき流れの

果に」へと移っていきます。1つのエッセイの中で、作品から作品へ話題が流れるように移り変わる様は、読んでいて小気味良いものです。著者の幅さんのように、読書を重ね数多の作品に触れることで、作品同士の思いも寄らない結びつきを見つけることができるのなら、読書って味わいがあって面白いと感じます。

読書は生活をする上で必須事項ではありません。「本なんて読まなくたっていい」と言えばその通りなのでしょうけれど、読書の奥深さを知るきっかけに、まずは本書から始めてみてはいかがでしょうか。

ちなみに、本書に登場する「エヴァンゲリオン新劇場版：Q」「オイディプス王」「タイムマシン」は、芸術の森キャンパス・ライブラリーに視聴覚資料や文庫本などで所蔵がありますので、気になった方はこちらでもご覧になってみてくださいね。

参考文献

幅允孝「本なんて読まなくたっていいのだけど、」晶文社、2014
芸術の森 2F 一般図書 019.9/Hab

エンジェルフライト：国際霊柩送還士

桑園キャンパス・ライブラリー司書

森田 桃花

近年、グローバル化に伴って、旅行、留学、仕事、結婚など、様々な理由で海外へ赴く人が増えている。多くの人はきっとポジティブな気持ちで出掛けて行くはずだ。しかし、もしも旅先で、海外の見知らぬ土地で命を失ってしまったら？ その人は一体どうやって日本に帰って来るのだろうか。また、大切な人の訃報を受けた残された人々はどうしたらよいのか。本書で紹介されている国際霊柩送還士の仕事は、そんな旅先で亡くなってしまった人と、残された人々のためにある。

国際霊柩送還士の仕事は大まかに言えば、海外で亡くなった日本人を遺族のもとに帰すことと、反対に、日本で亡くなった外国人を本国へ送り帰すことだ。しかし、一口に帰すと言っても、ただ遺体を搬送するだけではない。遺体を日本に送るために必要な行政機関での手続きや、海外の国際霊柩送還士と搬送方法について打ち合わせも行わなくてはならない。

また、海外から送られてくる遺体は、事故で欠損していたり、飛行機で運ばれてくる都合上、気圧の影響でダメージを受けていたりすることもある。遺族の目に触れる前に、生前の姿を取り戻せるよう、[VOID]のスタンプが押されたパスポートを見ながら修復し、化粧を施す作業も行う。

「国際霊柩送還」という物々しい響きに対して、本書で紹介されている国際霊柩送還を専門とする会社「エアハース」の人々の仕事は、地道で献身的に感じる。遺体を引き渡すと、遺族が「ありがとう」「よく帰って来たね」と泣く場面がよくあるのだという。一般的な葬儀も、故人を送る儀式であると同時に、遺族のグリーフケアの側面を持つと言われている。大切な人の突然の死は心情的にどうしても受け入れにくい上に、海外で亡くなったとなれば、より実感が湧かないものだろう。遺体から生前の面影が失われてしまっていれば、なおさらだ。エアハースは、遺族が落ち着いて故人と対面できるように、様々な事務的な手続きを行い、故人の遺体を修復し、搬送する。そうして遺族が、確かに故人が日本へ「帰って来た」ことを受け入れられるように、エアハースは労力を割いているのだと思う。国際霊柩送還士の仕事は、海外で大切な人を亡くした遺族にとっての最初のグリーフケアなのだと感じられる。

参考文献

佐々涼子「エンジェルフライト：国際霊柩送還士」集英社、2012
芸術の森 2F 一般図書 673.93/Sas
桑園 一般図書 673.93/Sas

企画展紹介

芸術の森キャンパス・ライブラリー企画ミニ展示

水木しげる：関連図書、集めてみました。

2024年6月12日(水)～ 8月25日(日)

芸術の森キャンパス・ライブラリーでは、「水木しげる：関連図書、集めてみました。」と題し、2024年6月12日(水)～8月25日(日)の期間、企画ミニ展示を行いました。隣接する札幌芸術の森美術館で開催された、水木しげる生誕100周年を記念する「水木しげるの妖怪 百鬼夜行展～お化けたちはこうして生まれた～」に（一方的に）合わせたものです。来館いただいた方々へ向けて、その世界観を少しでも楽しんでいただければという思いで企画いたしました。

このミニ展示では、当館所蔵図書18点を展示し小規模ながらも4つのカテゴリー分けをしました。1つ目は水木しげる先生の図書13点、2つ目は水木先生が妖怪を研究するにあたって大きな影響を受けたとされる図書2点、そして、3つ目は哲学にも造詣が深かった水木先生と哲学というくくりで2点、4つ目は2004年に開催された荒俣宏・京極夏彦プロデュース「Oh!大水木しげる展」の図録1点です。特にこの過去の図録は、今回の展示とどう違うのか、異なる視点からのアプローチを楽しめる貴重な1点だったと思います。

展示にあたっては、利用者のみなさまの目に留まりやすいよう、入退館ゲート近くにコーナーを設置しました。また、美術館

とのつながりを強調するため、そのチラシを活用し、POPなどは世界観を壊さないようある程度色合いをそろえました。また、展示図書冊数が多くないことから1冊1冊が良く見えるよう、また手に取りやすいように配置しました。一般的に妖怪のイメージとして怖い・暗いというキーワードが挙がるかと思いますが、中には、ポップに承認欲求を満たしたい妖怪もいるようですので、暗くなり過ぎないように若干意識して全体を整えました。

展示開催中は、目に留まりやすい場所に設置していたこともあってか、利用者の方々がたびたび展示を眺め、図書を手に取る様子がカウンターからうかがえました。学内者向けにTeamsで周知したことも足を運んでみようと思うきっかけになったかもしれません。また、美術館で展示をご覧になった後だったのか、図書を借りていく方もちらほらといらっしゃいました。図書の貸出しは図書館ならではのサービスですので、美術館の展示と合わせて楽しんでいただけたのではないかと思います。

当館の展示を通して、新たな知の発見や興味を誘うきっかけになったのであればうれしい限りです。

(芸術の森キャンパス・ライブラリー)



【企画ミニ展示の様子】



自著紹介

『知能の物語』『計算論的思考ってなに?』

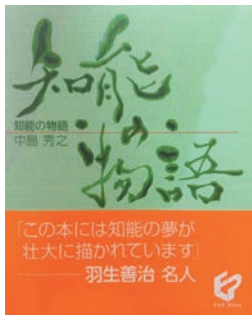
札幌市立大学 学長
中島 秀之

知能の物語

著者: 中島 秀之

発行: 公立はこだて未来大学出版会 出版年: 2015

芸術の森 2F 一般図書 007.13/Nak



私の40年にわたる人工知能研究によって得られた知見をまとめた本。コンピュータプログラムとして実現される人工の知能と生物の自然の知能を比較することで、知能の本質に迫ろうとした本。「理論」ではなく「物語」としているのは、人工知能研究は自然科学研究と異なり、実験による

検証が困難であるという性質を持っているため、「物語」として評価するのが良いとする私の主張による。物語の客観的評価は無理という主張もあるが、数々の文学賞が、万人の納得する評価をしていることから、不可能ではないと考えている。

計算論的思考ってなに?

著者: 中島 秀之

平田 圭二 (著、編集), 南部 美砂子 (著), マイケル・ヴァランス (著), 片桐 恭弘 (著), 美馬 のゆり (著)

発行: 公立はこだて未来大学出版会 出版年: 2022

芸術の森 2F 一般図書 141.5/Nak



Jeannette WingのComputational Thinking (Communications of the ACM, 2006) を私が日本語に翻訳し情報処理学会誌に掲載したのがことの始まり。このエッセイはコンピュータサイエンスを専攻し、computational thinking (以後「CT」) を会得した学生は

他の、経済、政治など、いかなる分野でも通用するという主張をしている。英語ではすべての子供に必要な思考能力として3R (Reading, wRiting, aRithmetic) があるとされているが、WingはこれにCT (Rがないけど) を加えるべきであると主張している。

ヴァランス教授が未来大の学生に日本語訳を読ませたとこ

著者紹介

1952年、兵庫県は西宮の生まれ。関西弁と東京弁のバイリンガル。1983年、東大大学院情報工学修了(工学博士)。同年、日本のAI研究の最高峰であった電総研に入所。産総研サイバーアシスト研究センター長を経て2004年より公立はこだて未来大学学長。2016年より東大先端人工知能学教育寄付講座特任教授。2018年より現職。

将棋の羽生善治名人は「この本には知能の夢が壮大に描かれています」と帯に書いてくれた。

編集工学研究所の松岡正剛さんがこの本を詳細に読み込んでくださり、私も気づかなかったことを指摘していただいた。この時に津田一郎(本学特任教授) さんを交えて鼎談をして出版する予定ができた(松岡×津田の対談はすでに出版されている) のだが、その直後に松岡さんが逝去されてしまい、この話は中島×津田の対談になりそうだ。

ちなみに公立はこだて未来大学(以後「未来大」) 出版会は当時未来大学長であった私と、当時近代科学社社長であった小山透さんの相談で立ち上げた仕組みである。出版費用は未来大が出し、編集から販売までの実務は近代科学社が行う自費出版である。売り上げは未来大に還元され、著者に印税は入らない。

ろ、理解できないという。未来大はコンピュータに強い学生が多いのだが、彼らですら理解が難しいらしい。私にはすんなり理解できたWingのエッセイを読み直してみると、計算論的なキーワードが並んでいるが、具体例は示されていない。つまり、このエッセイは概念をすでに知っている研究者向けに書かれており、未学習の学生向きではないということだ。そこで、未来大の学生を対象にセミナーシリーズを開催して、計算論的思考とその有用性を伝えることにした。その記録が本書の下地となった。

しかし、この作業は困難を極め(やさしい具体例を考えるのが案外難しかった)、2015年の翻訳発表から7年の歳月を要するプロジェクトになってしまった。この間、世界中でCTの教育の取組が普及して行ったのだが、日本では残念ながら「プログラミング思考」として矮小化されてしまった。CT(計算論) はプログラミングより遥かに広い概念である。

附属図書館 貸出・視聴ランキング

集計期間: 2023/4/1~2024/3/31



図書貸出ランキング

芸術の森

AV視聴ランキング

No.1 ゴールデンカムイ(ヤングジャンプ・コミックス)シリーズ
野田サトル著, 集英社, 2015-2022.7 芸術の森 2F 一般図書 726.1/Nod

No.2 3色だけでセンスのいい色:見てわかる,迷わず決まる配色アイデア
Ingetar-e著, インプレス, 2020.6-2022.11 芸術の森 2F 一般図書 757.3/Ing

No.3 死神永生 上・下(三体:3)
劉慈欣著, 大森望, 光吉さくら, ワン・チャイ訳, 早川書房, 2021.5 芸術の森 2F 一般図書 923.7/San/3

No.4 誰のためのデザイン?
:認知科学者のデザイン原論 増補・改訂版
D.A.ノーマン著, 岡本明訳, 新曜社, 2015.4 芸術の森 2F 一般図書 501.83/Nor

No.5 イケアでつくったオフィス&ショップ:
Office,SOHO,Shop,School,Salon,Showroom…
イケア・ジャパン株式会社監修, 美業之日本社, 2012.12 芸術の森 2F 一般図書 526.67/Ike

総 評

昨年に引き続き、「ゴールデンカムイ」シリーズが1位にランクインしました。また3位には「三体」シリーズの第3部がランクインしています。2024年1月には「ゴールデンカムイ」の実写映画が公開され、映画のロケ地が主に北海道を中心に撮影されました。そして、世界的ベストセラー原作「三体」の実写ドラマも公開されました。このような理由で、貸出が増えたのかもしれませんが、2位、4位、5位はデザインと建築関係の図書が上位を占める結果となりました。2位にランクインした本はSNSで大評判となり、発売されてすぐに品切れになった人気のある図書でした。

(芸術の森キャンパス・ライブラリー:中里)

※「ゴールデンカムイ」は、シリーズ全体の貸出回数を集計しています。また「3色だけでセンスのいい色」はPart1・2、「死神永生」は上・下を含み貸出回数を集計しています。

図書貸出ランキング

桑園

AV視聴ランキング

No.1 領域別看護過程展開ガイド:
地域・在宅成人老年小児母性精神 第2版
任和子編著, 照林社, 2022.4 桑園一般図書 492.914/Nin

No.2 病期・発達段階の視点でみる疾患別看護過程
任和子編著, 照林社, 2020.12 桑園一般図書 492.914/Nin

No.3 ウェルネスの視点にもとづく老年看護過程:
生活機能に焦点をあてたアセスメント 第2版
奥宮暁子編著, 医歯薬出版, 2019.12 桑園一般図書 492.929/Oku

No.4 生活機能からみた老年看護過程+病態・
生活機能関連図 第4版
山田律子, 内ヶ島伸也編集, 医学書院, 2020.11 桑園一般図書 492.929/Yam

No.5 根拠がわかる母性看護過程:
事例で学ぶウェルネス志向型ケア計画
中村幸代編, 南江堂, 2018.4 桑園一般図書 492.924/Nak

総 評

過去には看護研究や看護論の図書がランク入りしていましたが、2023年度は看護過程に関する図書が上位を独占する結果となりました。6位以下にも看護過程の図書がランクインしており、多くの学生に関心を持たれていることが分かります。新型コロナの影響で落ち込んでいた貸出冊数ですが、徐々にその数が増えてきました。学習に役立つ資料はもちろん、気分転換のできる読み物等もありますので、これからもどうぞ図書館をご利用ください。

(桑園キャンパス・ライブラリー:関野)

No.1 One flew over the cuckoo's nest(カッコーの巣の上で)
directed by Mios Forman/produced by Saul Zaentz and Michael Douglas/based on the novel by Ken Kesey, ワーナー・ホーム・ビデオ (distributor), c1998 芸術の森 1F AV 778/One

No.2 Top gun maverick
ジョセフ・コシンスキー監督, NBCユニバーサル・エンターテイメント(発売), 2023 芸術の森 1F AV 778/Top

平成狸合戦ぽんぽこ(ジブリがいっぱいCOLLECTION. Studio Ghibli DVD video)
高畑勲著/スタジオジブリ編, スタジオジブリ/徳間書店(発売), 1994 芸術の森 1F AV 778.77/Ghi

海がきこえる(ジブリがいっぱいCOLLECTION. Studio Ghibli DVD video)
氷室冴子原作/望月智充監督, スタジオジブリ(制作)/ブエナ ビスタ ホーム エンターテイメント(発売), c1993 芸術の森 1F AV 778.77/Ghi

Mr.(ミスター) インクレディブル
ブラッド・バード監督, ブエナビスタホームエンターテイメント(発売), c2005 芸術の森 1F AV 778.77/Mri

リメンバー・ミー
directed by Lee Unkrich/co-directed by Adrian Molina/produced by Darla K. Anderson/executive producer John Lasseter/screenplay by Adrian Molina and Matthew Aldrich, ウォルト・ディズニー・ジャパン(発売), 2017 芸術の森 1F AV 778.77/Rem

No.2 パス・ライトイヤー
directed by Angus MacLane/producer Galyn Susman, ウォルト・ディズニー・ジャパン(発売), 2022 芸術の森 1F AV 778.77/Buz

アンダルシアの犬
ルイス・ブニエル監督, アイ・ヴィーシー (発売), 2002 芸術の森 1F AV 778/And

Le diable probablement
de Robert Bresson/producteur délégué, Stéphane Tchalgadjieff,Imagica TV/紀伊國屋書店(distributor), 2008, c1977 芸術の森 1F AV 778/Dia

Coda
シアン・ヘダー監督・脚本, キヤパGAGA(発売・販売), 2022 芸術の森 1F AV 778/Cod

総 評

アカデミー賞主要5部門を独占した不朽の名作「One flew over the cuckoo's nest(カッコーの巣の上で)」と、1986年公開「Top gun」の36年ぶり続編として話題となった「Top gun maverick」の2作品が同率1位に選ばれました。近年の傾向としてやはり洋画人気が伺えます。また、ジブリやディズニー関連も根強い人気があり、複数タイトルがランクインされています。2位の「海がきこえる」は、原作本(氷室冴子著, 徳間書店, 芸森2F 一般, 913.6/Him)もありますので、興味がある方は併せてチェックしてみてください。視聴覚資料は、貸出可能なものもあり、館内視聴ブースの利用もできますので書籍と併せてぜひ活用してみてください。

(芸術の森キャンパス・ライブラリー:廣瀬)

No.1 看護師の役割と仕事
(DVDで学ぶ精神科看護講座:精神科看護の基本:1)
香間真美監修, 中島映像教材出版, 2015 桑園 AV 492.927/Sei/1

No.2 薬物療法と看護の基本
(DVDで学ぶ精神科看護講座:精神科看護の基本:2)
香間真美監修, 中島映像教材出版, 2015 桑園 AV 492.927/Sei/2

No.3 患者さんの強みを見つけ出すためのコミュニケーションスキル
(DVDで学ぶ精神科看護講座:精神科看護の基本:3)
香間真美監修, 中島映像教材出版, 2015 桑園 AV 492.927/Sei/3

ユマニチュード:優しさを伝えるケア技術
IGM Japon/医学書院, 2014 桑園 AV 369.26/Hum

No.4 うつ病の患者事例
(看護教育シリーズ, 精神看護のためのアセスメント事例集:vol.1)
医学映像教育センター制作・著作, 医学映像教育センター, c2017 桑園 AV 492.927/Sei/1

No.5 統合失調症急性期の患者事例
(看護教育シリーズ, 精神看護のためのアセスメント事例集:vol.2)
医学映像教育センター制作・著作, 医学映像教育センター, c2017 桑園 AV 492.927/Sei/2

No.6 統合失調症慢性期の患者事例
(看護教育シリーズ, 精神看護のためのアセスメント事例集:vol.3)
医学映像教育センター制作・著作, 医学映像教育センター, c2017 桑園 AV 492.927/Sei/3

総 評

AV資料は「精神科看護の基本」シリーズ3点が上位を独占しました。また、毎年ランクインしている「看護教育シリーズ」から、今回は「精神看護のためのアセスメント事例集」3点が4位に入り、精神看護のDVDが多く貸出される結果となりました。AV資料の貸出回数は図書と比べると少なめです。館内視聴スペースや館外貸出可能なDVDも多くありますので、学習の参考に活用してみたいいかがでしょうか。

(桑園キャンパス・ライブラリー:阿部)